

## ディレクターメッセージ

浅春の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。  
平素は格別のご高配を賜り、心から感謝いたしております。

お陰様で2009年に始動した東京アートポイント計画事業は、今年、10周年を迎えることができました。これまでに東京アートポイント計画を支えてくださった皆様、Tokyo Art Research LabやArt Support Tohoku-Tokyoにご参加ご協力いただいた皆様に改めて心より御礼申し上げます。

10周年を記念し、今年3月には、私達の拠点である「ROOM302」(3331 Arts Chiyoda内)において、Open Room 2019「東京アートポイント計画の10年とこれから 2009年→2019年」を開催し、10年間の刊行物200冊を展示紹介いたしました。また、これまで10年間の活動のエッセンスをまとめた書籍『これからの文化を「10年単位」で語るために—東京アートポイント計画2009-2018』をアーツカウンシル東京として刊行いたします(3月末配本予定)。

文化事業は「社会の変化」と「文化が成長する速度」という異なるふたつの時間軸がタイミング良く交わることをつくるような仕事です。今回お届けした9種の刊行物は、2018年度の活動成果の一端ではありますが、同時に複数年の時間をかけて醸成した事業の実りでもあります。ぜひ、ご一読いただけましたら幸いです。

植物も、人間も、実をつけ、収穫までにかかるべき時間があります。  
だからこそ現在だけでなく、来たるべき時代を予見するような豊かな思考を携え、実践を試み、同時に社会と深くかかわりながら「10年単位の時間」で文化を育もうとする、覚悟と技術を持ち続けたいと考えています。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

アーツカウンシル東京 東京アートポイント計画 ディレクター



森 司

## OVERVIEW | 2018年度の取り組みを振り返って

### 東京アートポイント計画

東京の地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを実施し、NPOの活動と組織の両面を支援する取り組み。

#### 文化事業を「10年単位」で語るために

今年度は10事業を共催しました。東京の東側、墨東エリアの「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」、西側の府中市を舞台とした「Artist Collective Fuchu[ACF]」が新たに始動。今回お届けしたトッピングイースト「ほくさい音楽博」のドキュメントブックは音楽のプロジェクトの成果をあえて写真集というか

たちでまとめました。トッピングイーストは今年度で東京アートポイント計画としての共催を終えますが、今後も東東京をベースに活動を展開していくことでしょう。この3月は東京アートポイント計画の10周年企画展示と書籍出版を行いました。2019年度も10周年企画を続けていきます。 <https://tokyoartpoint.jp/>

### tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげる学びのプログラム。

#### 「つくる」ためのスタディを試みる

スクールプログラム「思考と技術と対話の学校」とスキルの検証や確立を目指す「研究・開発」、3331 Arts ChiyodaのROOM302を「拠点」として活用するプログラムを展開。新たな試みとして“東京で何かを「つくる」としたら”という投げかけのもとで5組のナビゲーターと参加者がチームをつくり、リサーチや実験を繰り

返した「東京プロジェクトスタディ」を開始。『Tokyo Art Research Lab 2010-2017 実績調査と報告』を発刊し、これまでの歩みも振り返りました。東京アートポイント計画やArt Support Tohoku-Tokyoとの連動性も高め、アートプロジェクトの現場の基盤整備に取り組みました。 <https://tarl.jp>

### ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

東京都による芸術文化を活用した東日本大震災の被災地支援事業。

#### 「外」からかかわり、その先をつくる

東日本大震災から8年目を迎えた東北3県で継続的に事業を実施。複数年の取り組みの成果がかたちとなってきました。岩手県釜石市のかまいしこども園の「ぐるぐるミックス」は先生方と共に活動をつくりあげています。宮城県松島湾を中心に活動する「つながる湾プロジェクト」は「ハゼ」と「牡蠣」に続く『松島湾の船図

鑑』を発行。福島県いわき市の復興公営住宅で活動を展開する「ラジオ下神白」は東京での「報奏会」も開催しました。ジャーナル『FIELD RECORDING』は第2号を発刊し、震災10年を前に東京からのかかわりを活かし、東北の県の境界を超えた取り組みをつくり始めています。 <http://asttr.jp>

Words Binder 2019 / Box+Letter

発行日 | 2019(平成31)年3月25日 アートディレクション&デザイン | 川村格夫  
発行 | アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団) 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階  
Tel: 03-6256-8435 Fax: 03-6256-8829 E-mail: info-ap@artscouncil-tokyo.jp URL: <https://www.artscouncil-tokyo.jp>  
© 2019 Arts Council Tokyo

# Words Guide 2009▶▶2018

東京アートポイント計画は都内各地で2009年から現在まで全47団体、38件のアートプロジェクトに取り組んできました。その過程で生まれた約200点の書籍の「ことば」から10年間の思考と経験の軌跡をご紹介します。

\*以下のことばは「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」(会期:2019年3月2日~18日)の展示の一部を使用したものです。  
\*これまで発行してきたドキュメントの一部はTokyo Art Research Labウェブサイト「図書室」(tarl.jp/library/)でご覧いただけます。

アートプロジェクトを通じて、まずは人口の1パーセントでもいいから、単年度のなかで成果を求めるような、評価主義や効率主義みたいなものだけでは社会が死んでしまうという認識を持つ人が増えたらいいのですが。  
『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』p.57

お前が絵を描くなら、文章を書くな、このまちの住人になるなよ。距離をとれ。

『東北の風景をきく FIELD RECORDING vol.02』p.44

このまちは結構ものを作ってきて、プロデュース、要するに製作はしたけれども、クリエイティブしてきたかというところでもない。クリエイティブしたものを真似ることは上手という、いまだに昔の日本型のかたちです。だからこそ、アーティストが発想したのを見たいんです。  
『墨田のまちとアートプロジェクト—墨東まち見世2009-2012ドキュメント』p.153

違う道を通ってみる  
『ノック!—じぶんの地域ともう一度出会う10の扉—』p.34

自分の価値観が壊されるとか、見ていた世界がもうひとつバージョンアップするためには、気持ちのいいものだけを見せてもしょうがない。  
『アートプロジェクトの悩み—現場のプロたちはいつも何に直面しているのか』p.93

## 十年関わる入り方、百日関わる入り方

『LOBBY—はじまりの場を創る』p.31

公共の公は「みんな」だ。けど、東京では、その「みんな」に自分が入っていると感じるのが難しい。  
『戯曲 | 東京の条件』p.14

境界線の向こうと向き合いながら何かを創り上げていくには、「正しさ」を追い求めて気負うより、生活を慈しみながら楽しんで考えていく態度がきっと必要だ。  
『東日本大震災後、4年目の語り。—7つのケース、宮城の9人の声の記録』p.199

多様性の創造は面倒くさいけど本当は楽しいもの。その楽しみの発見がないと、共有空間というものは生まれないのではないかな、と思います。  
『ART BRIDGE Issue 01 Spring 2015』p.5

## 関わりしろ

『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本(増補版)』p.64

外へ出たとき、劇場や稽古場で当たり前と思っていた考え方や作り方が通用しないことに気づきました。新しいことをするには、作り方も新しくしないといけない。作り方から作らないといけない。しかも積極的に試行錯誤をしないといけない。  
『アトレウス家の建て方』p.154

変化を拒み、あたらしい挑戦から目を背けると、私たちの可能性は閉ざされる。  
『三宅島大学誌』p.99

つくりかた研究所の行ってきた大きな活動のひとつは、端的に言えば、「問題にすらなりえないようなどうでもいい問題」について「だらだらと考え続ける」ことである。  
『つくりかた研究所の問題集』p.211

評価とは、プロジェクトについて有効なフィードバックを提供するための情報を収集し、分析するシステムです。  
『アートプロジェクトを評価するために—評価の(なぜ?)を徹底説明 評価ゼミレクチャーノート』p.8

この「アート」は刻々と変化し続けるから、輪郭線では捉えられないが、だいたい同じ場所を旋回している。小鳥に近づくときのように、そっと、さりげなく、そばに寄ること。  
『ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト 2010-2013』p.8

つねに多数派と少数派、常識と非常識は入れ替わり、重層的かつ複層的な境界線を、自他ともに引き続けながら生活している「私たち」。人々の多様な生のあり方を、誰がどのような観点からまなざすかによって、境界線は揺れ動き、ずれを生み、つなぎ変わってゆく。  
『JOURNAL 東京迂回路研究 1』p.11

ここで起きたことは、どこでも起こり得ることだし、もしかするとこれまで散々繰り返してきたことなのかもしれない。  
『6年目の風景をきく 東北に生きる人々と重ねた月日』p.91

そもそも私たちは東京に「住んでいる」のか、それとも何年間も「滞在している」のか? 『日常の巡礼』p.4

「このイベントはいったい誰のためにやるんですか」。  
『「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」2011-2013 ドキュメント』p.8

3.11が [REDACTED] ている。  
『Ways to End Public Art by Relight Project』

こういうプロジェクトって、お互い暗黙知でやっているの、暗黙知で共有した景色で「何となくわかってるよね」って感じてやっていることに、ちょっとした危機感がある。そこをもう一步深く行くためには、「秘かな表現」でありながら、見た景色について次にどうやってそれを明確に「言葉」にしていけるか。  
『「やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる」小金井アートフル・アクション! 2009-2017活動記録』p.165

一般的な美術展が、「すでに起きたこと」としての作品を鑑賞者という集団へ差し出すことだとすれば、アートプロジェクトは「これから起こそうとすること」へ向けて、集団的な身体をつくってゆく営みであると言ってもいいかもしれません。

『TOKYO ART RESEARCH LAB』p.9

思えば1年前、1枚の妄想絵から  
『NICORABAN』p.1

失うことは一大事に違いないけど、ずっと繰り返されてきたことで、じゃあ、毎回、その喪失と向き合うためには、やっぱり予行演習が必要で、看取りの時間をみんなで上手くこなしてゆく練習の機会は、太古の昔もあったと思う。  
『東京スーブとブランケット紀行 2014-2017』p.87

じぶんの師匠は、じぶんでさがすのだ。  
『三宅島大学 平成23年度大学案内』